

住友の大阪

令和3年11月14日(日) 10:00～11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

「大阪と住友は、昔から切っても切れない仲である」と、大阪府観光連盟推薦、左門士郎著の「大阪歴史の旅」の159ページは書き始め、「住友はその伝統の上に今日の大コンツェルンを築いたことが特色といえよう。」と文を結んでいる。読み進むと「別子の景気は世間のうわさを高め、大阪では「別子長者三番続」と題した歌舞伎が舞台にかかるさわぎ・・・・・・・・。」と綴っている。

住友は、江戸時代に京都から大阪に進出し、天下の台所と言われまでに発展してきた大阪で日本一の銅吹屋となっていた。明治以降も大阪を活動の拠点として経済活動を続けてきた。住友では、本社も長く大阪に置いていたので大阪は住友の町である。大阪を綴った本を幾つも読み進め、住友の大阪を訪ねてみる。

2. 大阪の成り立ち

7000年～6000年前の縄文時代前期には、大阪湾はずっと奥まで入り大阪平野のほとんどは海の底であった。そこに上町大地が半島のように北に延びて、河内湾になっていた。

河内湾には淀川水系と大和川水系からの土砂が堆積するとともに、上町台地西側沿いには偏西風による砂地が北へ向かって伸び、天満砂堆、難波砂堆が形成されて湾口が狭められていく。3000年～2000年前の縄文時代晩期から弥生時代前期には堆積が進んで河内潟となり、1800年～1600年前の弥生時代後期から古墳時代前期には更に堆積が進み、完全に淡水化して河内湖となる。

大阪における都市の歴史は上町台地から始まる。難波宮と四天王寺、石山寺内町、秀吉の大阪城下町が上町台地に構想されていく。仁徳期には天満砂堆が掘り割られ、掘り割った堀江は、難波の政治的重要性を高め、流通上も住吉の地位を奪い取り、奈良の都の外港を確かなものとした。そして遣唐使もここから旅立った。しかし、延暦4年(785)には神崎川が江口付近で淀川と繋がれると、都と西国の結節点の位置を低下させていった。

上町台地の西側は徐々に陸地化していったが、湿地帯でしかなかった。大阪城下町を船場から西船場へと拡張していくときに、堀を掘って排水しつつ都市開発をしていった。大阪三郷の西に多くの新田が開発されていった。

貞享期の川村瑞賢の淀川改修、宝永元年(1704)の大和川付け替えは、大きな影響を与える。大和川付け替えで堺の港は土砂で埋まっていき衰退していく。

近代に入ると、大阪港の築港や明治43年(1910)の新淀川完工なので近代都市として

発展していく。それに伴い近世に新田開発された地域はまず工業・港湾地域として都市化の波にのまれていく。明治22年(1889)の市制施行においても基本的に大阪三郷を引き継いで出発するが、明治30年(1897)の第一次市域拡張、大正14年(1925)の第二次市域拡張によって、かつての周辺農村部を含み大都市大阪となっていく。

※大阪三郷：大阪城の西に拡大された町域は、天満組、北組、南組に、行政上まとまったのを三郷と呼んだ。大まかには大川の北側が天満組、大川の南側では本町通りを境にして北組と南組に分かれる。

3. 住友ゆかりの地

内淡路町・淡路町

住友が京都から大阪に第一歩を記したのは、2代友以の元和9年(1623)ころである。現在の東区内淡路町あたりに出店と銅吹所を設けた。大阪夏の陣後の大阪復興・再開発として伏見をはじめとして各地の商人の移住の先陣を切ってであった。粗銅の搬入や精銅の積み出しとして水運に恵まれた大阪が極めて有利との判断であったことは疑いない。事業の基礎が固まると寛永7年(1630)に東横堀川を越えて現在の淡路町1丁目、大阪城の真西に本邸を構えて、本拠を京都から大阪に移した。

※天保年間に作成と推定される「浪華名所独案内」の東横堀川にかかる本町橋と平野橋の間の橋(思案橋)の西に、「淡路町スジ」と町名が出ている。平野橋西の平野橋筋と思案橋の瓦町筋の間が淡路町筋である。東横堀川と長堀が交わる西南は、銅吹所・住友と出ている。

※水の都大阪の都市計画

東横堀川 天正13年(1585)に、総構堀の一部として開削されていた。

西横堀川 慶長年間に開削

天満堀川 慶長年間に開削

阿波堀川 慶長年間に開削

道頓堀川 元和元年(1615)に開削

江戸堀川 元和3年(1618)に開削

京町堀川 元和年間に開削

海部堀川 寛永年間に開削

長堀川 寛永年間に開削

立売川 寛永年間に開削

薩摩堀川 寛永年間に開削

安治川 貞享年間に開削

堀江河 元禄11年(1698)に開削

鰻谷

大阪で銅吹屋として隆盛の歩みを始めた住友は、寛永13年(1636)に、東横堀川を南に下り、東横堀川と長堀川の交わる島之内の北東隅の鰻谷に家屋敷と銅吹所を移した。たちまちに日本一の銅吹所(銅精錬工場)となった。宝永5年(1704)には棹銅の39%を生産した。(江戸時代の町名・鰻谷は消滅したが、かろうじて通称で今も使われている。)

明治維新で大阪本店が新政府に接収され、長堀の製錬施設が稼動しなくなった。銅の精錬地を別子銅山のある新居浜の立川に移して山元精錬することになるが、明治6年(1873)まで住友家の事業の本部であった。明治9年(1876)に閉鎖になった。

銅吹所があった東側は日本庭園として整備された。西側は、住友家本邸となり、大正4年に茶臼山へ移すまでほぼ230年間ここに居を構えた。茶臼山に移った後は別邸、社員寮となった。現在は、日本庭園跡は住友銅吹所史跡公園として整備され、精錬炉跡、レブリカの銅橋、ビリヤード場がある。邸宅跡の西側は銀行事務センターが建設された。

現在、長堀川は埋め立てられて道路となり、東横堀川も埋め立てられて道路となり、その上には阪神高速道路の環状線が走っている。

※鰻谷吹所の給銀：鰻谷吹所では、その技能が世界的にも高く評価されていた。別子銅山の大半の稼ぎ人の半年で給銀200匁以下であったが、吹所では合吹で350匁、熟練を要する棹吹で750匁ほどを得ていた。

上本町・谷町筋

上本町の実相寺と谷町筋の久本寺が住友の菩提寺である。実相寺には2代目友以、3代目・友信、4代目友芳までが眠る。広瀬幸平も併祀されている。久本寺には5代目以降が眠る。

富島・中之島・今橋・北浜

明治6年(1873)に、住友は文明開化に先駆けて水陸交通の便のいい富島に出店を設ける。明治8年(1875)に、富島を事業の本店とした。英国製の白水丸は、富島を拠点として神戸・新居浜を結ぶ。

本店を富島に移した後、明治28年(1895)に中之島へ、明治35年年(1902)に今橋、明治41年(1908)に北浜へと本店を移していく。

府立中之島図書館 明治維新後、大阪は近代都市として発展していくにつれて、文化・教育施設への関心が高まっていった。

住友家第15代当主、住友吉左衛門友純はシカゴ美術館が寄付により拡充されていることを知り、江戸時代以来大阪を本拠として住友の事業を展開してきた感謝のしるしとして社会貢献を考えていたところ、明治33年(1900)に、大阪府で図書館建設の話が持ち上がったが、大阪府が府立図書館を設置するのに予算が5万円にすぎないことを知り、建

設費 15 万円、図書購入基金 5 万円を寄付した。

住友家の寄付を受け、明治 37 年(1904)にネオ・バロック様式で建設された。設計は野口孫市、日高^{ゆたか}胖。大正 11 年(1922)、左右の両翼が増築された。昭和 49 年(1974)、国の重要文化財に指定される。

大阪市立東洋陶磁美術館

昭和 57 年(1982)に、安宅コレクションの国宝 2 点、重要文化財 12 点を含む中国・朝鮮陶磁の逸品役 1000 点を擁する大阪市立東洋陶磁美術館が住友グループから大阪に寄贈された。

住友私立職工養成所

大正 4 年(1915)に、住友は近代化に伴う貧富の格差を憂慮し、社会救済と優秀な技術者を養成するため、港区市岡に住友私立職工養成所を設立した。後に、住友工業学校、住友工業高等学校と改称し、昭和 31 年(1956)に、尼崎市に移管して尼崎市立尼崎産業高等学校となった。

第五回内国勸業博覧会・慶沢園

住友家では明治 28 年(1895)頃から茶臼山に別邸を営んでいた。明治 36 年(1903)に、第五回内国勸業博覧会が天王寺会場で開催された。その時に隣接していた住友別邸の一部が会場用地に供された。

大正 4 年(1915)に、本邸を鰻谷から茶臼山に移した。移転 6 年後の大正 10 年(1921)に、本邸敷地、庭園及び茶臼山の 18,000 坪を公園と美術館建設を希望条件として大阪に寄贈した。伊藤正文、海上静一の設計で昭和 2 年(1927)に着工。途中工事が中断するなどしながら 10 年近くの歳月を費やし昭和 11 年(1936)、天王寺公園内に完成した。

私立大阪住友病院

大正 10 年(1921)に、当時の西区恩貴島北之町(現在の此花区西島町)に、私立大阪住友病院を開業した。別子山での住友病院開設の明治 16 年(1883)から数えて 39 年後である。

銅座

江戸幕府の長崎貿易の輸出銅である御用銅の買い上げ、御用銅を確保するための地売り銅の調整のために設置された。

銅座の設置	第 1 回	元禄 14 年～正徳 2 年	12 年間
	第 2 回	元文 3 年～寛延 3 年	13 年間
	第 3 回	明和元年～明治元年	103 年間

銅座の要務 大阪の吹屋が諸国から集まる荒銅をどれくらい買ったか。
どれくらいの棹銅を造ったか。(輸出用銅)
どれくらい地売り銅を造ったか。
将来どれくらい棹銅を売り上げるか。
銅座がどれくらい銅を買い上げるか。

以上のことについて厳密に報告した。

銅座の一番の目標は御用銅の買い上げ。そのために御用銅を確保するために粗銅の調整をした。

第三次銅座跡 明治13年(1880)、船場の商人によって愛珠幼稚園が建てられ、現在に至っている。正門脇に銅座跡の石碑が立っている。適塾の遺構は、愛珠幼稚園の北側に残っている。銅座跡の石碑から少し西には、明治2年(1869)に廃校となった懷徳堂の跡を示す石碑もある。

4. キャピタン一行の銅吹所見物

出島のキャピタン一行が、第一次銅座から第三次銅座が置かれていた期間中において、江戸参府の復路での大阪滞在中に、住友の銅吹所を見学するのは慣例となっていた。危険な作業であったが、異国交易御用にあてられる「棹銅」の製造現場をどうしても見物したかったのであった。

キャピタン一行は、銅座役人をしていた長崎屋が阿蘭陀宿を担当していたので、銅製錬現場の見学においても銅座が連絡や案内の労を取っていた。キャピタン一行が見学を訪れると、住友の屋敷の外は群衆であふれた。シーボルトも銅吹所を訪れて、鼓銅図録と鉛石箱を手土産として貰っている。

吹所の見学が終わると、直ちに住友の座敷に招き入れられて、酒肴のもてなしがなされた。縁や軒下からは、家内手代を通じて見物する客もあった。それらの見物客にも握り飯と煮しめが振舞われた。

泉屋の文政9年(1826)の「紅毛人入来之控」によると、当日は朝10時に準備にかかり、20余名の手代が座敷や吹所などの分担を決めて接待役を務め、時刻が来ると遠見を処々に出すとの騒ぎであった。午後3時に一行を迎えている。

加毘丹	52歳	ヨハン・ウイルヘルム・デ・ステルレル
外科	24歳	ヒリップス・フレイデレキ・シーフルト
筆者	22歳	ヘンデレキ・ビルゲン

この三人に、通訳や接待の大名役人など数十名が付き添っていた。

そのあたりをシーボルトの日記で見してみる。

6月11日(旧暦5月6日)

正午にはふたりの町奉行に謁見する予定になっていた。われわれはいくつもの通りを通ってから、京都の時よりずっと遠くにある彼らの屋敷に着いた。謁見は前と同じように行われ、それが済んでから日本流のもてなしを受けた。ここからオランダや支那の商館に銅を供給している商人のもとに赴き、そこで粗銅から延棒に鑄込むまでの製銅法の全過程を見た。このたいへん裕福な男はわれわれを全くヨーロッパ流にもてなし、そのうえオランダの食器さえ持っていた。またオランダ人のファンであるこの人は、製銅法を簡単に記した本と、粗鋳から銅の精製した延棒までを順序よく取り揃えた立派な標本を私に贈ってくれた。われわれはこの人のところでたいへん愉快地語り合い、それから鳥を売る人のところへ出かけたが、非常に値段の高い

ツルとタカのほかには取り立てていうほどのものはなかった。夜おそくなってからやっと宿舎にもどった。

【シーボルト著・斎藤信訳「江戸参府紀行」（平凡社）P242から】

※銅を供給している商人	9代目の住友友聞
延棒	棹銅
製銅法を簡単に記した本と標本	鼓銅図録と鉛石箱

5. 住友の足跡

大阪商船

海運の重要性を熟知していた広瀬幸平は、外国汽船や三菱汽船など大きな船会社に対抗するため、明治17年(1884)西日本の弱小船主55名を結集して大阪商船会社を設立した。

本社は、大阪の交通の要所であった安治川河口の富島町(現在の大阪市西区富島)に置いた。開業時、船舶数93隻、本社員109名、支店員30名、会員1309名。

大阪伸銅所

明治30年(1897)、住友伸銅場を創業する。大正2年(1913)、住友伸銅所と改称する。その後住友総本店の合資会社改組を機に大正10年(1921)、住友合資会社伸銅所と改称。続いて大正15年(1926)、住友伸銅鋼管株式会社に改組し、安治川工場を伸銅所とする。昭和3年(1928)、桜島に新工場を建設して、ここに伸銅所を移転した。昭和10年(1935)、住友伸銅鋼管株式会社と株式会社住友製鋼所が合併して住友金属工業株式会社となった。昭和3年(1959)、住友金属工業株式会社の伸銅、アルミ圧延部門が分離して住友軽金属工業株式会社となった。

大阪倉庫

住友銀行は並合業から発展した関係上、銀行設立時から倉庫業を兼業していたが、明治32年(1899)、住友本店倉庫部として創業した。その後住友総本店の合資会社改組を機に大正10年(1921)、住友合資会社倉庫部と改称。続いて大正12年(1923)、資本金1500万円で株式会社住友倉庫に改称した。

今では、倉庫、港湾運送、国際輸送などの物流事業、船舶運航事業、都市部での不動産賃貸事業と広範囲の業務を営んでいる。

大阪北港

大正8年(1919)12月、大阪市の大阪築港造成工事が資金難で中断していたので、住友は臨時土木課築港事務所を設けて事業参加で進め予定の大正15年(1926)3月で完成する。第1号繫船岸と横棧橋の背後には住友倉庫を整える。

大正10年(1921)7月、住友諸工場に近い恩貴島北之町に新居浜の別子病院に習い、大阪住友病院を開業する。

大正8年(1919)12月、正蓮寺川沿地主組合が主体となって資本金3,500万円で大阪北港株式会社が成立する。初代社長に住友総理事の鈴木馬左也が就任する。大阪北港本社と事務所は大阪市東区北浜5丁目31番地に定める。

大阪北港株式会社は、昭和19年(1944)11月に株式会社住友ビルディングと合併して住友土地工務株式会社と改称する。翌月には長谷部竹越建築事務所と住友本社不動産課の業務を合わせた。そして昭和20年11月に日本建設産業株式会社になり商事部門に進出し、やがて昭和27年(1952)6月に住友商事株式会社と改称する。

昭和15年(1940)の地図を見ると、新淀川と安治川の地先の北港には、住友金属工業、住友電気工業などが張り付き、大阪港には住友倉庫が張り付いている。

住友ビルディング

住友財閥の住友総本店として、地上6階、地下1階で大正15年(1926)に完成した。財閥解体後は連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）第一軍司令部、住友銀行本店を経て現在は三井住友銀行大阪本店となっている。

住友家15代当主の住友吉左衛門友純が、住友本社内に設計事務所を組織し、野口孫市、日高^{ゆたか}胖、長谷部鋭吉、竹越健造らの建築家を集め、5年以上を費やした。平成7年の阪神大震災でも損傷せず、モダン建築としての歴史的価値を重視して耐震向上を図りそのまま保存することになった。

6. 大阪経済界の発展に寄与した住友総理事

広瀬幸平

初代目住友総理事として、別子銅山の近代化により住友グループの基礎を築き、我が国近代産業を育成し、大阪商船会社を設立し、大阪商法会議所、大阪株式取引所などを立ちあげた。

また、大阪硫酸製造所の頭取、関西貿易社の副総監、大阪製銅会社の社長などを歴任し、大阪経済の発展に寄与した。

伊庭貞剛

2代目住友総理事として、環境の世紀と言われる21世紀を100年前に先取りして実践した、世界的先覚者・伊庭貞剛も大阪商業講習所、大阪紡績、住友伸銅場、大阪商船学校、さらに後の大阪市立大学となる大阪商業高校などを立ち上げ、大阪経済の発展に寄与した。

鈴木馬左也

3代目住友総理事として、別子銅山を軸として住友の事業を多角的に展開し、盤石の住友を確立した鈴木馬左也も、住友銀行を株式会社に移行し、住友私立職工養成所、大阪住友病院、大阪北港、日米板硝子株式会社などを立ち上げ、工事中断の大阪港を完成させ、住友倉庫も設置し、大阪経済の発展に寄与した。

7. 住友の浜

落語の「次の御用日」のはなしの中で、「とうやん(お嬢さん)が縫い物屋へ行くことになり、常吉がお共することになる。口喧嘩をしながら、安錦橋の南詰め、住友の浜にかかって参ります。」と住友の浜の地名が出てくる。

ここに住友さんの屋敷があったので、長堀沿いのこのあたりを「住友の浜」と呼んだのである。現今、大阪で昼間寂しいところなどは、どこを探してもないが、以前はちょいちょいあった。南では、住友の浜あたりは、昼日中でも人通りがなかった。今から考えると不思議に思われるが、銅の吹き所であったから、工場界限は生産に携わっていた人たちだけで、一般市民はいなかったわけである。

落語の中では、「川向こうを通る物売りの商人の売り声が横堀川を渡って聞こえてくる。——遠くの方で打っている油締めあぶらぢめの掛け矢かけやの音がコツーン、コツーンと聞こえてくる。なんとう寂しいなと思いつながらふりが道をとつて行く。」

また落語の「佐々木裁き」にも「住友の浜」が出てくる。「西町奉行の名奉行といわれた佐々木信濃守が、家来一人を供に連れて、大阪町中見廻りで、安錦橋の南詰め、住友の浜へやって参ります。」落語のはなしは、子供の奉行ごっこへと展開していく。

原田伴彦、矢守一彦、矢内昭著の「大阪古地図物語」(毎日新聞社)の「長堀川と島ノ内」の項の中で「元和八年成就の記録もある長堀川には、東に長堀橋がかかって堺筋を通し、西に心斎橋があって心斎橋筋を南下させるが、この長堀橋以東の岸を「住友の浜」、佐野屋橋以西の岸を「大阪屋の浜」と呼び、ともに銅吹の浜で、前者には泉屋(住友)吉左衛門が、寛永十三年以来経営した鰻谷の吹所、後者には大阪屋久左衛門が経営した炭屋町の吹所があり、くしくも長堀川の東西両横堀と屈折点に大阪の代表的銅精錬地帯が形成されていた。

※「売翁茶偈語」に収められている詩に「鴨河浜」が出てくる。三条大橋の橋詰の所を指す。川に臨む箇所を「浜」と称した。

8. 日本永代蔵の中の住友

貞享5年(1688)年に出た、井原西鶴の「日本永代蔵」巻六第五「知恵をはかる八十八の升搔」の中に新しい長者紹介の中に出てくる。

一切の人間、目あり鼻あり、手足もかはらず生れ付きて、貴人、高人、よろづの芸者は格別、常の町人、金銀の有徳うとくゆえ世上に名を知らる事、これを思へば、若き時よりかせぎて、分限のその名を世に残さぬは口惜し。俗姓・筋目にもかまはず、ただ金銀が町人の氏系図になるぞかし。たとへば、大職冠つりの系あるにしてから、町屋住ひの身は、貧なれば猿ましの身にはおとりなり。とかく大福ねがひ、長者となる事肝要なり。その心山ごとくにして、分限はよき手代ある事一なり。難波なにわの津にも、江戸酒つくりはじめて一門さかゆるものあり。又、銅山にわかにかかりて、俄分限になるものあり。吉野うるし屋して、人のしらぬ埋み金うづがねある人もあれば、小早作り出して、舟問屋どひやに名をとるものあり。家質かじちの銀借かねかして富貴になるものあり。鉄山の請山して次第分限の人あり。これらは近代の出来商人、三十年このかたの仕出しなり。

※ 大職冠の系 藤原鎌足の系図

江戸酒つくり 銅山にかかり	鴻池家 奥羽や備中で銅山を経営していた住友家。「日本永代蔵」が出版された2年後の元禄3年(1690)には、四代目の住友友芳が支配人の田向十右衛門を別子銅山の踏査に出している。
吉野うるし屋 小早作り出し 舟問屋 三十年このかた	吉野屋仁左衛門家 大阪から江戸への菱垣廻船 泉屋平右衛門 万治元年(1658)から30年間

9. おわりに

別子山、東平、新居浜は、大阪とは距離的には遠く離れているのだが、意識的には身近に思われるので、実に不思議である。新居浜も大阪も、住友の町ゆえに、別子銅山史の縁が距離を縮めている。大阪について書かれた本を重ねて読んでいくと、シーボルトの住友銅吹所訪問も196年の隔たりを感じないのも、又、不思議である。新居浜市が今だに、別子銅山の歴史が息づいている町ゆえによるのだろうか。

落語の中にも「住友の浜」が出てくるくらい、住友の名は広く知られていて、屋敷地と吹き所のある長堀と東横堀の角は、荷揚げ、荷下ろし場として大阪のランドマークとなっていた。

【参考文献】

住友の風土	倉田一良	住友商事(株)
大坂の産業と社会	北崎豊二	毎日放送
学芸の大坂	足立巻一	(株)編集工房ノア
歴史のなかの大坂	塚田 孝	岩波書店
大坂古地図物語	原田伴彦・矢守一彦・矢内 昭	毎日新聞社
私の大坂	小松左京	中公文庫
大坂の地名を歩く	若一光司	ワニ文庫
大坂歴史の旅	左門士郎	(株)令文社
禁制尾坂の町と人	脇田 修	人文書院
大坂の歴史を歩く	大谷晃一	(株)創元社
中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ		百周年記念事業実行委員会
中之島	中之島をまもる会	(株)ナンバー出版
江戸参府紀行	シーボルト 斎藤信・訳	東洋文庫
日本永代蔵	井原西鶴	(株)小学館
米朝はなし	桂米朝	講談社文庫
大阪古地図むかし案内	本渡 章	創元社